



TITLE:

京大広報 No. 464

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 464. 京大広報 1994, 464: 746-761

ISSUE DATE:

1994-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209171>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 464

京都大学広報委員会



装い新たになった大学本館前広場

目次

修士学位授与式における総長のことば……………	747
卒業式における総長のことば……………	749

<大学の動き>

平成5年度修士学位授与式……………	751
平成5年度卒業式……………	751
平成6年度入学者選抜学力試験の結果……………	752
平成5年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式……………	753
平成6年度医療技術短期大学部 入学者選抜試験の結果……………	753
部局長の交替等……………	754

<栄誉>

熊田 誠名誉教授が恩賜賞・日本学士院賞 を、角屋 睦名誉教授、志村令郎教授、 真崎知生教授が日本学士院賞を受賞……………	755
--	-----

<保健コーナー>

集団検診のあり方……………	758
---------------	-----

<資料>

平成5年度京都大学職員研修実施状況及び 平成6年度京都大学職員研修実施計画……………	758
---	-----

<随想>

二度目の停年 名誉教授 桑原道義……………	760
-----------------------	-----

<コラム>

大学における将来計画の余地とは 青木伸好……………	761
------------------------------	-----

修士学位授与式における総長のことば

平成6年3月23日

総 長 井 村 裕 夫

本日ここに名誉教授の諸先生、各研究科長、教職員の方々の御臨席のもと、学位授与式を挙行し、修士の学位記をお渡しすることができましたことは、京都大学としてまことに喜びとするところであります。

本日修士の学位を得られた皆さんは文学56名、教育学23名、法学51名、経済学22名、理学199名、薬学50名、工学622名、農学170名、人間・環境学43名、合計1,236名であります。今日までの皆さんの御努力に心から敬意を表し、お喜びの言葉を申し上げます。本年は社会人のための専修コースを終えた方29名が修士の学位を得られました。京都大学としてまともに社会人の修士が誕生したのはこれが最初であります。多忙な生活の中で修士の課程をめたく終えられたことに、心からの祝福を贈りたいと思います。

二十世紀の後半は、先進諸国はかつてない豊かさを経験しました。そのため大学進学率は急速に増え、社会の人々の知識レベルが向上しました。学問、特に自然科学の進歩はまことにめざましいものがあります。そして技術革新の加速は一つの技術のライフサイクルを短くしています。新しい技術が次々と生み出され、例えば私の専門の医学の領域では超音波、コンピュータ断層、磁気共鳴イメージングと新しい画像診断の技術が数年おきに登場し、それらを理解する知識が要求されます。これからの社会では、人々は自分の知識を如何に update して行くかが大きい課題となってきました。生涯教育、リカレント教育という概念が生まれてきたのも、このような時代を背景としたものであります。

従来我が国の大学院は研究者の育成を目指してきました。従って学部卒業生のごく一部が大学院に進むと言う状態であり、学部学生に対する院生の比率は5.1%と低い値です。因みにこの比率はアメリカ15.4%、イギリス34.6%、フランス20.1%（社会人のパートタイム学生も含まれています）であります。しかし技術革新の激しい現代社会においては、大学院が専門教育、リカレント教育の場を提供する必要が生じて参りました。特に修士コースは研究と専門教育を両立させて進めて行く必要があります。

従って本日修士課程を終えた皆さんの中には博士後期課程に進み、あるいは研究所に勤務していよいよ本格的に研究者の道を歩む人と、社会に出て、または社会に戻って今日まで学んだ知識を生かして活躍される人とがあると思います。いずれの道に進むにせよ、研究に直接又は間接にかかわって行かれることでありましょう。研究においては勿論独創的な概念を提出したり、今まで知らなかった現象を発見したりすることが何よりも大切であります。独創性こそは研究に求められる最も重要な要素であることに疑いはありません。

しかし一つの学問分野が発展するためには、最初のページに初めて筆を下ろす人だけでなく様々な型の研究者が必要であります。一例を挙げてみましょう。エンドウの交配実験で遺伝の法則を発見したヨハン・グレゴア・メンデルは、その成果を1865年自然研究会で2回に分けて発表しました。そのことは新聞にも取り上げられましたし、翌1866年には「ブルノ自然研究会誌」に発表されました。この雑誌は当時のオーストリア・ハンガリア帝国内はもとより、英国、米国など多くの国に送られています。またメンデル個人も40部の別冊を当時の有名な植物学者ケルナーやネーグリに贈呈しておりますが、誰にもその真価は理解されなかったようで、黙殺されてしまいました。またメンデル自身もブルノ修道院の院長に選ばれ、研究を続けることが大変困難となってしまいました。そして遺伝学の創始という近代科学の大きなエポックを作りながら、メンデルは十分評価されることなく1884年にこの世を去ります。メンデルの法則が再発見されるのは世紀の変わり目の1900年のことであります。

勿論この間メンデルの法則が全く注目をひかなかったわけではありません。例えばギーセン大学のヘルマン・ホフマンは1869年に発行した著書の中で、またスウェーデンのカール・ブロンベリは、1872年に学位を得た論文の中でメンデルの実験を紹介しています。更にロシアの植物学者シュマルハウゼンは1874年に発表した学位論文の中でメンデルを賞讃しました。またシュマルハウゼンの訪問を受けてメンデルの実験を知ったドイツのフォッケも著書にメンデルを紹介しています。このようにメンデルは少しずつ世に知られるようになっていましたが、その真価が認められるようになったのは、1900年オランダのフーホ・ド・フリース、ドイツのカール・コレンス、オーストリアのユーリッヒ・チェルマクラがそれぞれ独立にマツヨイグサやエンドウの交配実験で、メンデルの法則を確認し、相次いで発表したことによります。更にケンブリッジ大学の教授のウィリアム・ベイトソンも多くの動植物を用いてメンデルの法則を確認し、遺伝学が急速に発展することとなりました。なおこのようなメンデル再発見の熾烈な競争の中で、まだ近代化したばかりの我が国にも研究者がいたことを申し添えたいと思います。それは東京帝国大学農科大学の講師をしていた外山亀太郎で、1900年カイコの遺伝の実験を始め、メンデルの論文を知らずにメンデルの法則に行き着いたと言われています。彼の論文発表は1906年で少し遅れましたが、近代化の第一歩を踏み出したばかりの我が国に、このような創造性のある人材が生まれていたことはまことに驚くべきことであります。

話は少し横道にそれてしまいましたが、新しい時代を開くような、あるいはまたそれまでの定説を覆すような研究は、同時代の人には理解されにくいことが少なくありません。メンデルの場合、まさにそうであったと言えます。このことは学問の発展のためには、真に創造的な研究を正当に評価し、それを確認して更に発展させたり、世の中に広めたりする役割の研究者も必要であることを示しています。特に新しい仕事を広める人は、伝道師という意味で、evangelist と呼ばれています。メンデルの場合、有力な evangelist が、35年間も現れなかったのが不幸であったと言えます。

日本の研究者は、しばしば他の日本人の研究を無視したり、正当に評価しない傾向があり、その研究が外国で認められて初めて評価するということがよく言われます。残念ながらそのような傾向があることは、確かであると思います。最近抗ウイルス剤として肝炎の治療に広く用いられているインターフェロンは、1957年イギリスのアイザックスと、スイスのリンデマンによって発見されたものであります。実はその3年前の1954年に東京大学教授の長野泰一が同じ現象を「ウイルス抑制因子」として報告していました。氏はマウスにウイルスを感染させると、免疫現象が始まる前の4時間以内に抗ウイルス因子が作られることを発見したのです。一方3年後にアイザックスは鶏卵の漿尿膜細胞を培養し、インフルエンザウイルスを感染させるとウイルスの増殖を抑制する物質が産生されることを発見し、この物質をインターフェロンと名付けました。氏の発見は単に現象だけでありましたが、アイザックスは物質レベルで証明したため、第一発見者の栄誉を与えられたわけです。当時の我が国の状態では、まだそこまで研究を進めることは困難であったかも知れませんが、もし長野氏の研究の真価を見抜き、それを発展させる努力をした研究者が我が国にいたら、インターフェロンの発見の栄誉は我が国の学者のものになったかも知れません。独創的な仕事をするのが大変難しいと同様に、独創的な研究を正当に評価することもまた困難であります。研究者はそのような能力を身につけることも必要でありましょう。

皆様方のこれからの生活が実り多いものになることを祈念して、私の式辞と致します。

卒業式における総長のことば

平成6年3月24日

総 長 井 村 裕 夫

明るい陽光に木々の緑も甦り、生命がいさずく春が訪れて参りました。本日は、元総長、前総長、名誉教授の諸先生を来賓としてお迎えし、各学部長、教職員、御父兄の御臨席のもと平成5年度卒業式を挙行し、2,672名の学士諸君を送り出すことができますことは、京都大学としてまことに喜びとするところであります。

卒業生諸君、本日はおめでとうございます。「卒業」という言葉は学業を終えるという意味であります。それは学業は人生の最初のある時期だけするものであるという、従来の我が国の考え方から出た言葉でありましょう。しかし現代は何らかの形で生涯、学習を続けなければならない時代であります。その意味で英語の「graduation」の方が相応しい言葉でありましょう。これは grade（目盛、段階）と同じ語源を持つ言葉で、段階が一段上になることを意味しています。また卒業式を「commencement」といいますが、これは本来は始まり、すなわち事始めの式の意味であります。諸君のうちには大学院に進学し、専門分野の学問を続ける人がかなりあると思います。まさに一段上の学問が始まります。しかしより多くの諸君は実社会に出て、それぞれの選んだ職業に就くでありましょう。この場合にも本からの学習でなく、実社会の勉強が始まることになります。いずれの道に進むにせよ、今日は commencement の日、人生のスタート台であります。

スタート台というと私はリレハンメル冬季オリンピックの衛星放送を思い起こします。ジャンプのスタート台に座って出発を待つ選手、スピードスケートで微動だにせず合図を待つ選手には、緊張が一点に凝縮した厳しい美しさがありました。勿論人生は長いレースで状況は異なりますが、諸君はいま同様な緊張感に包まれて自分の歩むべき道を眺めているでありましょう。歌人の斎藤茂吉は、「あかあかと一本の道とほりたり たまきはる我が命なりけり」と歌っています。陽の光に照らされて明るく続いている道、それはまさに諸君の生命そのものでありましょう。しかし、諸君の歩む道は必ずしも平坦なものではありません。

世界はいま大きい転換期にさしかかっています。産業革命によって成立した資本主義社会は、今世紀に入って生産性の向上により一層発展し、先進諸国での生活は歴史に例を見ないほど豊かなものとなりました。しかし一方では科学技術と経済の発展が地球環境を破壊することもまた明らかになってきました。更にコンピュータの発明、マスメディアの発達、高学歴者の増加などは産業社会を大きく変貌させました。社会は、いまポスト産業社会へと移行する時期となっています。産業革命以来の、おそらくは二、三百年に一回と言ってもよいくらい大きい歴史の転換期にあると考えられます。ポスト産業社会がどのような社会になるのか、まだ明らかではありませんが、知識が、情報が大きい価値を持つ「知識社会」になることは疑いがありません。

このような変革の時代を生きる諸君に、私は個性を育て、自分のアイデンティティをしっかりと持って欲しいと希望します。従来我が国では個人より、組織が重視される傾向がありました。自分の意見は出来るだけ抑えること、「沈黙は金」が処世訓であったのであります。しかしこれからの「知識社会」にあっては様々な個性が要求されます。人と同じであるよりも、どれだけ人と異なった発想ができるか、異なった能力を発揮できるか、ということが尊重されます。

それでは個性を育てるにはどうすればよいか、それには自分の頭で考えることが何よりも大切です。現在のような情報化社会では、様々な情報が容易に手に入ります。そうした情報を分析し、批判し、更に系統づけることによって、初めて「知」と言えるものになります。勿論「知」は、情報を再生産する

ことも可能であります。こうした分析、批判、整理、再生産などの過程が「考える」ということであります。こうした過程を経てこそ、自分の考えを言葉で明確に述べることも可能となります。深く考える人、それは決して単線的にならず、人の考えに付和雷同することはありません。物事を単眼でなく、複眼で見ることのできる人でもあります。

それではよく考えるためにはどうしたらよいか、それは広く情報を集めることから始まります。一人の人間が経験して獲得できる知識は限られています。およそ人類の持ちえた最大の知性の一人であるゲーテですら、エッカーマンとの対話の中で「もし私が偉大な先駆者や同時代の人に負うた点を一々あげることができたら、残るところは僅かであろう」と言っています。まして凡人がよく考えるためには、他人の考え、材料、経験を集めることが大切です。現在はマスメディアやコンピュータなど様々な情報源がありますが、他の方法では伝達できない深い考えを伝えてくれるもの、それはやはり書物であります。読書によって初めて微妙な言葉と魂の働きを学ぶことができます。読書はまた人生の危機を救ってくれ、生きる力を与えてくれることもあります。何故なら書物はその生みの親と同じ魂を宿し、同じような発瀾とした生命力を持っているからであります。

今から50年前、第二次世界大戦の末期、大学から学生が戦場に駆り出され、多数の尊い人命が失われました。この悲劇を二度と繰り返さないために、戦没学徒の手記が『きけわだつみの声』という題の本として出版されました。その中で特に私が心を打たれたのは、戦争犯罪人としてシンガポールで処刑された木村久夫という京都大学経済学部学生の手記であります。木村青年は入獄する前に入手した田辺元の『哲学通論』を繰り返し読み、その本の余白に手記を書き残しました。その言葉の一つを引用しますと、「真の名著はいつどこにおいても、またいかなる状態の人間にも、燃ゆるがごとき情熱と想いとを与えてくれるものである」。死刑を待つという極限的な状況の中で、木村青年は、かつて教えを受けた田辺元の本を繰り返し読み、理解し、そして自分の考えをまとめて本の余白に書き込みました。読むこと、考えることによって彼は生きる力を得、学問への情熱を感じ、そしてこの世に生きた証を残したと言えましょう。幸い現在は平和な時代、本は簡単に入手できます。是非毎日少しずつでも読書をする習慣を身につけて下さい。

ウィリアム・オスラーはジョンズ・ホプキンス大学の初代の内科の教授で、その秀れた見識により多くの信奉者を生み出した人です。オスラーはベッドサイドに本を置き、就寝前、あるいは朝起きた時に本を読む習慣をつくることを奨めています。このベッドサイドライブラリーも一つの方法であると考えられます。

先程から諸君の生き生きとした顔を見ていると、私はある羨しさを感じずにはおれませんでした。私にはなくて諸君にある掛け替えのない尊いもの、それは若さであり、未来であります。未来には常に大きい希望と、何程かの不安がつきまといます。とくに次の世紀は人間を、そして人間と共生する地球上の多くの生命を何よりも大切にしなければならない「生命の世紀」となります。それは物事を一国のレベルではなく、地球規模で考えねばならない時代であります。地球上の民族が、それぞれのアイデンティティを保ちながらも、共通の目的に向かって協力しなければならない時代であります。そしてまた科学技術の進歩を善と信じ、物質的な豊かさを求める現代の意識に大きい転換を迫られる時代でもあります。こうした時代にあっては今まで以上に人間の叡智が求められます。どうか諸君はよく読み、よく考え、自分を取り巻く人間社会を、そして日本のみでなく世界を深く考察できる能力を身につけてください。諸君の前途が幸い多いものになることを祈念して、私の式辞と致します。

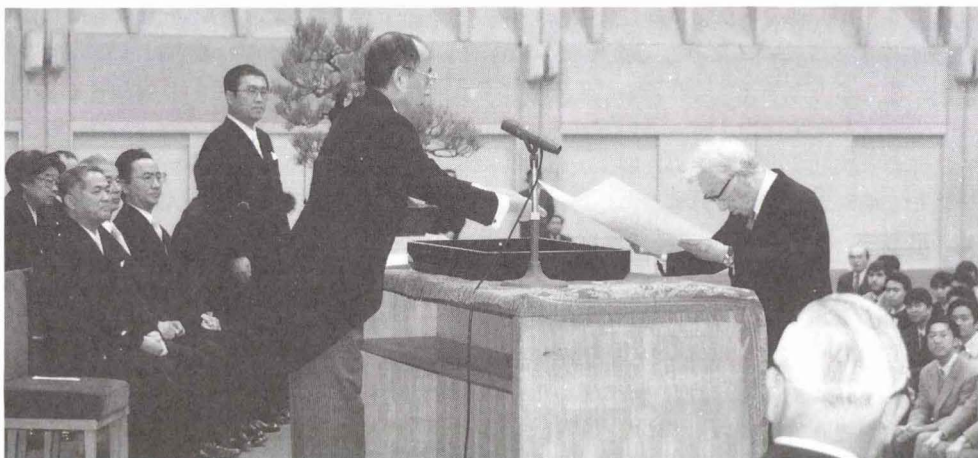
<大学の動き>

平成5年度修士学位授与式

3月23日(木)午前10時から、平成5年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授はじめ来賓出席のもとに行われ、学位記授与、「総長のことば」があって、午前10時30分終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科56名、教育学研究科23名、法学研究科51名、経済学研究科22名、理学研究科199名、薬学研究科50名、工学研究科622名、農学研究科170名、人間・環境学研究科43名の計1,236名であった。



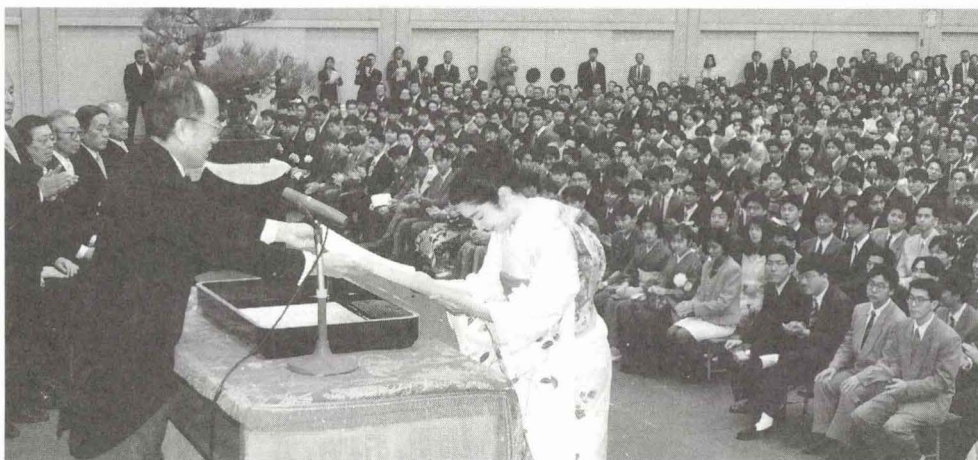
平成5年度卒業式

3月24日(木)午前10時から、平成5年度卒業式が、本学総合体育館で挙行された。

卒業式は、名誉教授はじめ来賓出席のもとに行われ、学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団、京都大学合唱団が協力）、学位記授与、「総長のことば」のあと、「螢の光」を斉唱して、午前10時45分終

了した。

新学士は、文学部183名、教育学部59名、法学部392名、経済学部273名、理学部314名、医学部118名、薬学部81名、工学部943名、農学部309名の計2,672名であった。



平成6年度入学者選抜学力試験の結果

平成6年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の前期日程試験は、2月25日（金）・26日（土）に、後期日程試験は、3月13日（日）・14日（月）に実施した。

学部別の受験者数、合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階選 抜合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率 (%)	(I) 合格者数	(J) 追加合 格者数	(K) 入学者数
総合人間学部	130人										134人
前期	55	309	5.6	306	305	5.5	1	0.3	58		
後期	20	318	15.9	297	175	8.8	122	41.1	20		
文学部	220										222
前期	190	650	3.4	650	645	3.4	5	0.8	193		
後期	30	434	14.5	283	129	4.3	154	54.4	30		
教育学部	60										63
前期	40	163	4.1	153	151	3.8	2	1.3	41		
後期	20	144	7.2	137	95	4.8	42	30.7	22		
法学部	400										408
前期	340	1,072	3.2	1,071	1,056	3.1	15	1.4	346		
後期	60	663	11.1	546	259	4.3	287	52.6	64		
経済学部	240										241
前期一般	160	534	3.3	534	529	3.3	5	0.9	161		
後期論文	50	342	6.8	270	256	5.1	14	5.2	50		
後期	30	408	13.6	390	220	7.3	170	43.6	34		
理学部	326									1	326
前期	294	856	2.9	821	817	2.8	4	0.5	294		
後期	32	1,235	38.6	1,186	798	24.9	388	32.7	32		
医学部	100										102
前期	90	385	4.3	365	355	3.9	10	2.7	92		
後期	10	303	30.3	277	169	16.9	108	39.0	10		
薬学部	80										85
前期	70	201	2.9	201	197	2.8	4	2.0	74		
後期	10	190	19.0	190	114	11.4	76	40.0	13		
工学部	1,060									2	1,061
前期	947	2,519	2.7	2,510	2,488	2.6	22	0.9	947		
後期	113	1,183	10.5	1,179	598	5.3	581	49.3	117		
農学部	325										335
前期	260	836	3.2	836	824	3.2	12	1.4	273		
後期	65	813	12.5	651	317	4.9	334	51.3	68		
小計											
前期	2,551	8,168	3.2	8,013	7,912	3.1	101	1.3	2,585		
後期	390	5,691	14.6	5,136	2,874	7.4	2,262	44.0	410		
計	2,941	13,859	4.7	13,149	10,786	3.7	2,363	18.0	2,995	3	2,977

(注) 1. 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

2. 法学部（後期）と経済学部（後期）には、外国学校出身者のための選考試験の募集人員20名以内と10名以内、志願者51名と46名、第1次選考合格者33名と28名、受験者26名と24名、欠席者7名と4名、合格者17名と9名、入学者16名と6名がそれぞれ含まれている。

平成 5 年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日(木)午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに、短期大学部卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前11時終了した。卒業生は、看護

学科79名、衛生技術学科38名、理学療法学科23名、作業療法学科19名で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20名の計179名であった。

(医療技術短期大学部)



平成 6 年度医療技術短期大学部 入学者選抜試験の結果

医療技術短期大学部では、平成 6 年度入学者選抜試験を 3 月 4 日(金)、5 日(土)に実施し、その合格

者氏名を14日(月)に発表した。

受験者数及び合格者数等は次のとおりである。

学 科	募集人員	志 願 者 数	受 験 者 数	合 格 者 数
看 護 学 科	80 人	265 人	230 人	105 人
衛 生 技 術 学 科	40	463	393	58
理 学 療 法 学 科	20	244	203	29
作 業 療 法 学 科	20	145	116	36
計	160	1,117	942	228

(医療技術短期大学部)

部 局 長 の 交 替 等

文 学 部 長

中川久定文学部長の任期満了に伴い、その後任として水垣 渉文学部教授（宗教学第二講座担当）が4月1日文学部長に任命された。任期は平成7年3月31日までである。

教育学部長

岡田渥美教育学部長の任期満了に伴い、その後任として高木英明教育学部教授（教育行政学講座担当）が4月1日教育学部長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

経済学部長

浅沼万里経済学部教授（開発経営組織政策講座担当）が4月1日経済学部長に再任された。任期は平成7年3月31日までである。

農 学 部 長

久馬一剛農学部長の任期満了に伴い、その後任として丸山利輔農学部教授（かんがい排水学講座担当）が4月1日農学部長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

化学研究所長

小田順一化学研究所長の任期満了に伴い、その後任として宮本武明化学研究所教授（有機材料化学研究部門担当）が4月1日化学研究所長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

基礎物理学研究所長

長岡洋介基礎物理学研究所教授（物性理論研究部門担当）が4月1日基礎物理学研究所長に再任された。任期は平成8年3月31日までである。

経済研究所長

佐和隆光経済研究所長の任期満了に伴い、その

後任として福地崇生経済研究所教授（経済計画研究部門担当）が4月1日経済研究所長に任命された。任期は平成7年3月31日までである。

大型計算機センター長

長谷川利治工学部教授（論理システム講座担当）が4月1日大型計算機センター長に再任された。任期は平成8年3月31日までである。

超高層電波研究センター長

松本 紘超高層電波研究センター教授（超高層電波工学研究部門担当）が4月1日超高層電波研究センター長に再任された。任期は平成8年3月31日までである。

環境保全センター長

佐田榮三環境保全センター長の任期満了に伴い、その後任として竹原善一郎工学部教授（基礎エネルギー化学講座担当）が4月1日環境保全センター長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

アフリカ地域研究センター長

田中二郎アフリカ地域研究センター教授（乾燥帯生態系研究部門担当）が4月1日アフリカ地域研究センター長に再任された。任期は平成8年3月31日までである。

保健管理センター所長

森下玲児保健管理センター教授（内科学専門）が4月1日保健管理センター所長に再任された。任期は平成8年3月31日までである。

体育指導センター所長

六車 照体育指導センター所長の任期満了に伴い、その後任として瀬地山 敏経済学部教授（経済理論講座担当）が4月1日体育指導センター所長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

＜榮譽＞

熊田 誠名誉教授が恩賜賞・日本学士院賞を、角屋 睦名誉教授、志村令郎教授、眞崎知生教授が日本学士院賞を受賞

このたび、熊田 誠名誉教授に恩賜賞・日本学士院賞が、角屋 睦名誉教授、志村令郎教授、眞崎知生教授に日本学士院賞がそれぞれ授与されることになった。授賞式は、6月上旬、日本学士院会館で行われる予定である。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

熊 田 誠 名誉教授

熊田名誉教授は福井県出身で、昭和18年京都帝国大学工学部工業化学科を卒業し、東京芝浦電気株式会社に入社した。昭和25年大阪市立大学理工学部助手となり、同27年同助教授、同31年同教授を経て同37年京都大学工学部教授となり、合成化学教室第4講座(有機金属化学)を担当した。昭和58年停年退官して現在に至っている。今回、なお、同時に受賞する共同研究者の東北大学理学部櫻井英樹教授は同講座の助教授であった。

同名誉教授の今回の受賞の対象となった業績は「有機ケイ素化学に関する研究」である。同名誉教授は一貫して有機ケイ素化合物、フェロセン、グリニャール試薬など有機金属化合物の反応論的、構造論的研究にたずさわってきた。特に、有機ケイ素化合物に関する業績は顕著で、ケイ素－ケイ素結合を含むポリシランに関する業績はアメリカ化学会より昭和42年 F.S. Kipping 賞を受賞した。同名誉教授はポリシランの合成法を初めて確立するとともにケイ素－ケイ素結合に特異な新反応を発見し、今日、材料科学の面から注目されるポリシランの化学の基礎を築いた。

さらに、遷移金属錯体を触媒とする有機合成反応の開発研究でも注目すべき業績がある。なかでも、ニッケルやパラジウム・ホスフィン錯体を触媒とするグリニャール試薬と有機ハロゲン化物のクロスカップリング反応の発見は重要である。炭素－炭素結合形成反応として有用で、有機合成で



広く利用されているだけでなく、この発見が契機となって有機金属化学の発展を大きく促した。また、キラル遷移金属錯体を用いる触媒的不斉合成反応でも先駆的業績を挙げた。

このように同名誉教授は有機ケイ素化学を中心とする有機金属化学に関して独創的な研究を展開し、数々の目覚ましい業績を挙げ国際的にも高い評価を受けてきた。退官後も組織委員長として国際有機ケイ素化学会議を京都で開催し、また有機金属化学の国際学術誌の編集委員を務めるなど、この学問分野の発展に大きな役割を果たしてきた。

以上のように熊田名誉教授の輝かしい業績を考えると、その受賞はまことに喜ばしい。

(工学部)

角 屋 睦 名誉教授

角屋名誉教授は、三重県出身、昭和27年京都大学農学部を卒業、本学大学院研究奨励学生前期課程、大阪府立大学、宇都宮大学を経て、同34年京都大学防災研究所助手に任用され、同35年同助教授、同39年教授に昇任され、その後28年間にわたって内水災害の研究に従事されたのち、平成4年停年退官された。現在、本学名誉教授、京都職業能力開発短期大学校校長として活躍しておられる。



同名誉教授の今回の受賞の対象となった業績は「極値水文学の展開と水利施設計画設計への応用に関する研究」である。

同名誉教授は、これまで貯水ダム・取水ダムやポンプ場など、各種水利施設の最適規模・安全設計の基礎となる洪水・渇水など極値水文学上の諸問題について独創的な研究を展開され、以下に大別されるような数多くの顕著な業績を挙げてこられた。

(1) 極値水文学の統計解析法に関する研究：豪雨や洪水など、極値現象の統計解析のため、順序統計学的に導かれる3形式の最大値分布を体系的に整理され、自らの提唱によるPlotting Valueの概念を利用する未知定数の推定法、小標本理論に基づく確率水文学の推定法や異常値の棄却検定の理

論を構築するなど、極値水文量の統計解析法の確立に大きく貢献した。

(2) 洪水比流量極値の地域的分布特性に関する研究：ダムなど水利施設の計画設計に必要な洪水比流量極値の地域的分布特性を解明し、地域別洪水比流量極値曲線の関数形を理論的に誘導して、その実用式を提示した。

(3) 長短期流出両用モデルの開発と洪水・渇水時におけるダムの実時間流出管理手法に関する研究：低水主体の長期流出解析と洪水主体の短期流出解析が同時に実行でき、かつ物理的意義もかなり明確な長短期流出両用モデルの開発を行うとともに、このモデルを活用した1～3時間先の洪水流量及び1～3か月先の渇水流量を予測するための実時間予測法を提案し、ダムの流水管理技法を大きく進展させた。

(4) 流域の都市化に伴う災害危険度変化に関する研究：わが国で丘陵地の開発・市街地の拡大が進みだした昭和40年から、世界的にも未知分野であった標記問題に取組み、昭和50年頃から、解析モデルの構成法、その他の諸理論や基礎的数値などを相次いで提案し、都市化ないし土地利用変化に伴う災害ポテンシャル変化の予測法の確立に大きく貢献した。

以上のように、角屋名誉教授の研究は、水利施設の計画設計に欠くことのできない水文学上の極値現象を対象として、詳細かつ厳密な理論を展開するとともに、これを実際問題に適用したもので、水利施設設計や防災計画の実用面への貢献は大きく、この成果は日本国内はもとより、諸外国でも高く評価されている。これらの研究に関連して、これまでも昭和38年農業土木学会学術賞、昭和57年京都新聞文化賞、平成4年日本農学賞・読売農学賞を受賞しておられる。

このような同名誉教授の目覚ましい業績を考えると、このたびの受賞はまことに喜ばしい。

(防災研究所)

志 村 令 郎 教 授

志村教授は、山梨県出身、昭和31年京都大学理学部を卒業、昭和33年本学大学院理学研究科修士課程修了後、直ちに米国に留学し、昭和38年米国

ラトガース大学大学院博士課程修了、米国ジョーンズ・ホプキンス大学医学部研究員、インストラクターを経て、昭和44年京都大学理学部に新設された生物物理学の助教授に採用され、昭和60年同教授となり、現在に至っている。



同教授の今回の受賞の対象になったのは「RNA プロセッシングに関する研究」である。同教授は、早くから DNA から転写された後の RNA のプロセッシングとスプライシングの重要性に注目し、この過程の分子機構の解明に取り組んできた唯一の日本の研究者である。

初期の大きな功績としては、大腸菌の tRNA 生合成に関する研究がある。tRNA 前駆体から不要部分を切り落とし、成熟 tRNA がプロセスされる際の tRNA 切断酵素 RNaseP の発現に、rnpA, rnpB の2種の遺伝子が関与していることを、分子遺伝学的手法を用いて明らかにした。また、この酵素は、1分子のタンパク質と RNA から構成され、突然変異体を用いた研究から RNA 成分が酵素活性をもつことを発見した。この発見は、Cech や Altman らによるノーベル賞の対象となった RNA 触媒活性の発見の端緒となった。また、RNaseP 変異体を利用し、大腸菌では、複数個の tRNA 遺伝子が連鎖して1つの転写単位、すなわち tRNA オペロンを形成していることを明らかにした。

次いで、ショウジョウバエの体細胞性分化を決定する遺伝子の選択的スプライシングの制御機構に関する研究で業績を挙げている。除去されるイントロンが異なる結果、異なる成熟 RNA がつくられる選択的スプライシング (Alternative Splicing) という現象が知られており、発生段階や細胞分化において重要な役割を果たしている。同教授は、遺伝子を培養細胞に導入し選択的スプライシングを解析する系を開発し、前駆体 RNA とスプライシング制御因子の相互作用を詳細に解析した。遺伝子産物が、前駆体 RNA の 5' スプライス部位やエキソン配列に直接結合することによって、スプライシング反応を阻害、あるいは逆にスプライシングを活性化することを明らかにし、世界に先駆けて選択的スプライシングの制御

機構を分子レベルで解明した。

スプライシングの基本的な機構の中で、まだ明らかにされていない最も大きな問題は、前駆体 RNA の切断と連結活性を担う物質の同定である。スプライシング活性を担う構造体（スプライソーム）のタンパク質成分中には、この酵素活性を担うタンパク質の存在は明らかにされていない。同教授は、*in vitro* スプライシング系、中間産物の固定化、UV クロスリンク法など新しい解析技術を開発し、スプライシング反応の進行とともに、U6snRNA が、切断・連結反応の起こる前駆体 RNA の特定の部位に存在していることを初めて明らかにし、U6snRNA が切断・連結活性をもつ可能性を初めて実験的に示した点で高く評価されている。

これら一連の研究に対し、平成3年京都新聞文化賞、平成5年日本遺伝学会木原賞が授与された。

以上のような同教授の輝かしい業績を考えると、その受賞はまことに喜ばしい。

(理学部)

眞 崎 知 生 教 授

眞崎教授は、東京都出身、昭和37年東京大学医学部を卒業、一年間のインターン修了後、東京大学大学院医学研究科博士課程に入学、昭和41年に同退学後、ただちに東京大学医学部助手に採用された。同50年筑波大学基礎医学系教授に転出、平成3年1月より本学医学部教授併任、同年4月より専任となり、現在に至っている。

同教授の今回の受賞の対象となったのは「エンドセリン（内皮由来血管収縮因子）の同定とその生理活性」である。

同教授の研究は、骨格筋、心筋、平滑筋、血管、血管内皮細胞と拡がり、それぞれの段階で大きな業績をあげている。最初、江橋節郎氏（東京大学名誉教授）のもとで同氏の発見した筋のアクチンミオシンについてその収縮増強因子、アルファアクチニンを精製、これが全く新しい蛋白質であることを発見した。さらに、その物理化学的性質、生物活性、その全一次構造、細胞内局在、分

子種とその意義などについて一貫してこの研究を続けている。

同教授はまた筋の蛋白質が筋発生分化の過程で分子種の変換を行うことを示した。この研究成果も国際的にきわめて高い評価を得、その後の筋蛋白質の遺伝子発現の研究の爆発的な展開を促した。

同教授はさらに平滑筋を中心とする研究へとすすんだ。この研究の中から構造蛋白質、M蛋白質の発見、いくつかの筋構造蛋白質の全一次構造、なかでも平滑筋ミオシン重鎖の全一次構造決定と、その推定高次構造の発表は高く評価されている。

またこの研究の過程で、内皮由来の強力な血管収縮因子を単離精製、構造決定し、これをエンドセリンと命名した。同教授はこのエンドセリンの化学構造、生物活性、3種の分子種の存在、受容体のクローニング、その構造解析、細胞内合成経路、細胞内情報伝達系の解析、またその生理的、病態生理的意義の解明などの仕事を組織的にきわめて短期間に行い、世界の多くの研究者の注目を集めた。エンドセリンは血管の機能調節機構に新しい概念を導入すると同時に、循環系以外でもこのペプチドが重要な働きをしていることが示され、生命科学分野全体に大きな影響を与えている。またエンドセリンの発見によって血管細胞生物学という新しい学問分野が形成されることとなった。

以上のように眞崎教授の目ざましい業績を考えると、その受賞はまことに喜ばしい。

(医学部)



前期日程試験合格者発表（3月9日工学部にて）

<保健コーナー>

集団検診のあり方

平成5年4月15日 (No.446) の保健コーナーで、本学教職員の人間ドックの成績から、本学教職員の健康状態の大まかな推移について書いたが、今回は集団検診のあり方について述べたい。

最近では1,200人以上の人が、いわゆる組合員Bコース（身体計測、血圧測定、心電図、胃X線検査、血液生化学検査、大腸ガン・スクリーニング検査、眼底検査、腹部超音波検査などを含む）の検診を受けている。高脂血症や糖尿病などのリスクが高い検査項目の推移については前に述べたが、その後も引き続き全般的な改善傾向がみられており、ライフスタイルの改善にたいする各自の努力の結果であり、喜ばしいことである。

今回は、人間ドックや健康診断を受けたあとの事後措置のあり方について考えてみたい。ガンは誰もが最も恐ろしい病気と考えており、自分だけはガンにかかりたくない、あるいはかかるはずがないと思ひ、信じている。平成4年度に限っても、その年の人間ドックで胃ガンは1～2名に発見されているし、腎臓ガンもある部局で2名同時に見つかるなど、少なくとも3名が手術を受けている。健康管理医の立場からすれば、年間少数と

はいえ悪い病気が早期に見つかり、処置されたことは不幸中の幸いであつたと考えざるを得ない。このほかにも肝臓、胆のうなどに異常が見つかる人は30%は下らない。問題はその後措置が十分なされているかどうかであるが、残念ながら不十分といわざるを得ない。検診結果を本人に伝える方法一つとっても、プライバシー保護の問題もあつて結構難しい。

本人への通知で、「肝臓腫瘍疑い」、「腎臓腫瘍疑い」、「副腎腫瘍疑い」などの記載方法については、至急改善の余地がある。通知をもらつて家族みんなで落ち込んだ話を聞くと、ガンの告知も総論賛成、各論反対という面が浮き彫りになる。

医療経済学や費用効果（コスト・ベネフィット）の面から、集団検診の是非がよく論じられるが、要は検診の受けっぱなしや不十分な事後措置、本人の健康に対する自覚の欠如こそが問題なのではないかと思うことも多い。

集団検診の成績をもとに積極的に働きかけて、慢性的な疾病のリスク・ファクターの軽減をはかるような方法についても、いろいろと十分でない状況の中で、何か良い方法はないかと模索している。組合員の皆さんのご意見を聞かせていただければ幸いである。

（保健管理センター 森下 玲児）

<資料>

平成5年度京都大学職員研修実施状況及び
平成6年度京都大学職員研修実施計画

平成5年度京都大学職員研修実施状況

大学における職員研修は、官職の職務の遂行に必要な知識・技能等を習得させ、かつ職員の能力・資質等を向上させることを目的として実施するものである。

平成5年度における本学主催の職員研修実施状

況については、次の表に掲げるとおりである。

なお、平成5年度の特徴としては、①前年度の研修方針を継承して研修内容の充実を図ったこと。②総合技術部の発足に伴い、技術官及び技術官補に対して、前年度に引き続きより高度な内容の研修を実施しているが、今年度は三巡目に入つたこと等が挙げられる。

() 中は他機関の受講者数で内数

研 修 の 名 称	実 施 期 間	対 象	受 講 者 数			研 修 場 所
			男	女	計	
新 採 用 職 員 研 修	4/ 6～ 4/ 9 (4日間)	新 採 用 職 員	38	34	72	国立若狭湾少年自然の家
国際交流担当職員研修	9/ 6～ 9/ 8 (3日間)	国 際 交 流 職 員 (採用後3年以上)	12	13	25	経 済 研 究 所 会 議 室
中堅職員研修(第9回)	6/29～ 7/ 2 (4日間)	事 務 系 職 員 (採用後3年以上)	31	19	50	京 大 会 館
主 任 研 修 (第1回)	5/31～ 6/ 3 (4日間)	主任(他機関を含む)	30(5)	17(2)	47(7)	関西地区大学セミナーハウス
〃 (第2回)	11/ 9～11/12 (4日間)	〃	35(13)	11(1)	46(14)	国立曽爾少年自然の家
監督者(係長級)研修	10/ 5～10/8 (4日間)	係長(他機関を含む)	32(5)	10(4)	42(9)	理学部附属瀬戸臨海実験所
技術職員研修(第10回)	7/13～ 7/15 (3日間)	行(一)教室系技術職員 (他機関を含む)	75(9)	3(0)	78(9)	附 属 図 書 館 ほ か
〃 (第11回)	2/ 1～ 2/ 3 (3日間)	〃	71(5)	3(0)	74(5)	〃
語学研修(英語・初級)	5/ 7～ 8/17 (60時間)	事 務 系 職 員	7	12	19	附 属 図 書 館
〃 (英語・中級)	8/31～12/14 (60時間)	〃	1	15	16	〃
合 計			332(37)	137(7)	469(44)	

平成6年度京都大学職員研修実施計画

平成6年度の京都大学職員研修実施計画は以下のとおりである。

研 修 の 名 称	実 施 時 期	対 象	予 定 人 員	研 修 場 所	備 考
新 採 用 職 員 研 修	4/ 5～ 4/ 8 (4日間)	新 採 用 職 員 (他機関を含む)	60	国立若狭湾少年自然の家	4/ 5 附属図書館
国際交流担当職員研修	9/ 6～ 9/ 8 (3日間)	事 務 系 職 員 (採用後3年以上)	25	附 属 図 書 館	
主 任 研 修	5/31～ 6/ 3 (4日間)	主任(他機関を含む)	50	関西地区大学セミナーハウス	5/31 附属図書館
〃	11/ 8～11/11 (4日間)	〃	50	国立曽爾少年自然の家	11/ 8 附属図書館
監督者(係長級)研修	10/ 4～10/ 7 (4日間)	係長(他機関を含む)	38	農学部附属水産実験所	10/ 4 附属図書館
技術職員研修(第12回)	7/12～ 7/14 (3日間)	行(一)教室系技術職員 (他機関を含む)	70	附 属 図 書 館 ほ か	
〃 (第13回)	1/31～ 2/ 2 (3日間)	〃	70	〃	
語 学 研 修 (英語・初級コース)	5/10～ 7/15 (40時間)	事 務 系 職 員	16	附 属 図 書 館	週2回午後 1回2時間
〃 (英語・中級コース)	9/27～12/ 2 (40時間)	〃	16	〃	週2回午前 1回2時間
実 務 講 習 会	10/17～10/20 (4日間)	実 務 担 当 職 員	延 べ 440	楽 友 会 館	庶務, 経理, 施設, 学生

